

芸術教科における文化学習の研究

—統合的アプローチに焦点をあてて—

【要 旨】

京都嵯峨芸術大学大学院

芸術研究科複合分野

G208001 奥 忍

芸術教科における文化学習の研究—統合的アプローチに焦点をあてて—

本研究は、芸術教育が「文化学習」として機能するための方策についての研究である。学習の方法論として統合的なアプローチに焦点をあてる。理由は、芸術教育を人間の生の営みの視点から考えるなら、複数の芸術分野が統合されて多角的な視角から学習対象に迫る統合的なアプローチに展望があると考えられるからである。なお、芸術教科の統合が世界的な動向であることも研究の重要な背景となっている。

研究目的は、「文化学習」に関する芸術教科の方法論を以下の3点で明らかにすることにある。

！ 教科別アプローチと統合的アプローチによる「文化学習」を比較し、その特質と課題を明らかにする。

” 統合的アプローチの開発の視点を提示する。

「文化学習」と表現技能学習のバランスを考慮した教科のあり方を提案する。

研究方法としては、文献研究と調査研究、実践研究を適宜組み合わせている。

研究の概要と論文の章・節の内容構成は以下に示す通りである。

仮 説：文化学習は、特定の文化に基づく教科の学習系統による教科別アプローチではなく、より柔軟で複眼視的な統合的アプローチが適切である。

理論構築：第1章 第1節—芸術教育における文化学習の必要性

現状分析： 第2節—日本の「音楽」「図画工作」「美術」の教科書分析

第3節—教科性に立脚するアメリカの「音楽」「視覚芸術」教科書分析

検 証：！ 第2章 第1節—教科統合のパラダイム概観

第2節—統合に関する世界的動向—アジア諸国を中心に—

第3節—事例研究：台湾における芸術統合教科「芸術と人文」

” 第3章 第1節—自文化学習の実践研究

第2節—日本の文化学習の実践研究

第3節—外国の文化学習の実践研究

結 論：第4章 統合的アプローチは文化学習にとって不可欠である。一方、教科の系統性はそれ自体が文化である。したがって教科別アプローチも尊重されるべきであり、両者を効果的に配置すべきである。

提 案： 教科別アプローチと統合的アプローチの良さを生かした、祇園祭鉦提灯型カリキュラム

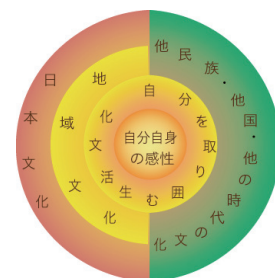


祇園祭鉦提灯型カリキュラム図

本研究では、文化学習に関して自分自身の感性が中央に位置し、周りの生活文化や地域文化、日本文化、他民族・他国・他の時代の文化へと広がる学習構造を想定している。

本研究で提案する学習プランは学習対象として「総合的な学習の時間」における文化交流や体験とは別のものである。本プランにおける統合的アプローチは芸術教科全体の学びの中で期間を限定して行われる。統合的アプローチの期間には「音楽」や「図画工作・美術」の学習内容の成果が各芸術固有の領域と融合・統合されて新しい学習内容が展開され、その成果の上に再び固有芸術の学習が行われる、という形で双方のアプローチの往復が繰り返される。そのことによって子どもたちは各文化の多面性や複合性、各文化の間には共通性と差異が存在すること、また、中学校や高等学校段階では異なった文化の接触によって新たな文化の様相が生まれること、自分自身もまた、そのような連鎖の中に生きていくことを学んでいくのである。

論文の要点を次頁に記す。



文化学習のための学習構造

1) 現状認識:

- ・教科書研究: 文化的アイデンティティの視点からの研究がこれまでほとんど行われていない。
- ・音楽の教科書教材: 生活や文化に関する教材は数多いが、説明文に文化や音楽と人間との関係性からの視点がない。
- ・美術の教科書教材: 多種多様な教材にあふれているが、学習すべき内容が不明確でカオス状態である。創作重視で文化の視点が薄く、過去の作品も創作のための刺激剤として扱われているにすぎない。
- ・音楽の概念学習: 概念を中心にカリキュラムを編成するために文化理解が歪曲され、文化内成員のそれと遠く隔たっている。
- ・美術の DBAE: 作品解釈の視点が概念重視によって限定されるとともに、技法重視の作品利用による作品自体の価値の矮小化が起きている。
- ・世界的動向: 芸術教科の存立を主として「創造性」に依拠してよいのか、疑問である。
- ・台湾の「芸術と人文」: 教科性にに基づく能力育成と文化理解のための先行事例として統合的アプローチのバランスに関して継続的に観察する必要がある。

2) 仮説の検証:

- ・教科別アプローチによる芸術学習の限界の指摘←第1章第2節と第3節
- ・芸術教育史から見た統合的アプローチの存在意義←第2章第1節
- ・アジア諸国の先行例、とりわけ台湾の事例研究による学習方法と学習材、実施のための施策←第2章第2節と第3節
- ・実践試行で見られた自文化、地域文化・日本文化、外国文化に対する理解の深化と表現力育成←第3章第1節～第3節

3) 実施のための課題:

- ・教育行政: ! 組織による経済的・設備的・人的支援体制 (含・チーム・ティーチングのための教員雇用)
” 教員養成機関における該当教科と学校教員の指導力の開発研究の保証
- ・教員養成機関: ! 効果的なチーム・ティーチング方法の開発
” 指導法・教材の開発
教員養成プログラムの構築
\$ 現職教員に対するリカレント教育の内容改善
% 教員自身の専門外、隣接領域の芸術分野の知と技能の習得
- ・カリキュラム構築: 統合的アプローチと教科別アプローチのバランス、すなわち最適な比率の検証
- ・指導法・学習材開発: ! 芸術教科のミニマル・エッセンシャルズ抽出 (総合的な学習の時間との差異化)
” 自己認識・自文化学習の学習材と統合的アプローチの学習方法の開発
日本文化に関する統合的アプローチの学習方法の開発
\$ 欧米中心の視点から世界の他地域への拡大
% 各文化固有の脈絡に基づく学習方法
& 負の側面を含めた文化の総体的な認識

4) 研究の意義:

- ! 音楽と美術、両分野の視点を持つこと。
- ” 芸術教育を創造性育成と安易に結びつけることに対する危険性を指摘していること。
- # 芸術教育が「文化学習」として機能するための有効性を検証していること。
- \$ 芸術教育における「文化学習」に関して実践試行による例示を含んでいること。
- % 統合的アプローチと教科別アプローチとを結合した芸術教育カリキュラムの提案していること。

5) おわりに:

以上のように多量で多面的で、しかも複雑に絡み合っている存在する課題を解決するためには、関連する教育関係者、研究者による芸術教育の意義についての深い洞察と、その洞察に基づく行動が必要とされる。具体的な行動の第一歩は、有意の関係者が協同して研究プロジェクトを立ち上げることでありと考えられる。

もくじ

はじめに	1
序章	5
第1節 問題提起・研究目的・研究方法	6
第2節 用語の設定	8
第1章 「文化学習」の視点から見た芸術教育	9
第1節 芸術教育における「文化学習」	10
1. 芸術の複合性／総合性	
2. 芸術教育における文化学習	
3. 自己のアイデンティティと文化学習	
4. 文化学習のための学習構造	
第2節 日本の「音楽」「図画工作」「美術」の教科書分析—文化学習の視点から—	12
1. 教科書の役割	
2. 「音楽」の教科書教材	
2.1 これまでの教科書研究	
2.2. 現行教科書の概観	
2.3. 教科書教材における「文化学習」	
3. 「図画工作」「美術」の教科書教材	
3.1. これまでの教科書研究	
3.2. 現行教科書の概観	
3.3. 教科書教材における「文化学習」	
4. 「音楽」と「図画工作」「美術」に共通する教科書教材による文化学習の可能性	
第3節 アメリカの教科別アプローチにおける文化学習	19
1. 「音楽」と「美術」における文化学習	
2. 教科別アプローチにおける文化学習の概要	
2.1. 「音楽」の学習	
2.2. 「視覚芸術」の学習	
3. 教科別アプローチにおける文化学習	
3.1. 「音楽」における文化学習	
3.2. 「視覚芸術」における文化学習	
4. 教科別アプローチから統合的アプローチへ	
第4節 第1章のまとめと仮説の提示	25
第2章 文化学習の方法としての統合的アプローチ	26
第1節 芸術教科統合に関するパラダイム	27
1. 伝統的な芸術教育観	
2. 1960年代以降のアメリカにおける統合的アプローチ開発	
3. 日本における統合的アプローチの変遷	
4. まとめ	

第2節	芸術教科の統合に関する世界的動向—アジアを中心に—	31
1.	世界的な動向	
2.	調査の方法	
3.	結果と考察	
3.1.	各国の統合状態の概観	
3.2.	教科・科目の名称の変化	
3.3.	国家カリキュラムにおける教科目標の変化	
3.4.	学習活動の変化	
3.5.	統合がもたらす学校教育の課題	
3.6.	教員養成の課題	
4.	アジア諸国の動向調査から得る示唆	
第3節	統合芸術教科における文化学習—事例研究：台湾の「芸術と人文」の場合—	35
1.	事例研究の視点	
2.	台湾の学校教育における芸術教科の概要	
3.	教科書教材の一例	
4.	授業計画例	
5.	統合から派生する課題について台湾で実施された解決方法	
6.	現時点での統合芸術教科「芸術と人文」	
7.	芸術教科の統合に関して台湾の事例から得る示唆	
第4節	第2章のまとめ	40
第3章	「文化学習」に関する統合的アプローチの試行	41
第1節	「自文化」に対する統合的アプローチ	42
1.	芸術教育における自己表現	
2.	自分自身の感性を認識し、表現する活動：音楽と描画の統合的アプローチ—愛唱歌—	
2.1.	授業の概要	
2.2.	学習過程	
2.3.	「愛唱歌」の説明と挙げられた曲について	
2.4.	「愛唱歌」を描く活動	
3.	自文化学習におけるこの活動の意味	
第2節	「日本文化」に対する統合的アプローチ	47
1.	日本の文化学習に関する「総合的な学習の時間」と芸術教科の学習	
2.	これまで行われた実践研究	
2.1.	事例1：日本文化の学習—椎葉の音楽文化学習—	
2.2.	事例2：日本文化の学習—「ものづくりと音づくりとをつなげた和文化教育」—	
3.	身近な日本文化に関する教育内容と指導方法の開発の実践的試み —地域の民話を基にした地域の方言によるミュージカル創作—	
4.	「日本文化」学習の課題	
第3節	「外国文化」に対する統合的アプローチ	
1.	外国文化に関する学習	52

2. これまでに行われた実践事例	
2.1. 音楽側からアクセスした世界の文化学習—<世界の国々>と<変奏曲づくり>—	
2.2. 美術側からアクセスした世界の文化学習	
・美術作品は世界を結ぶ全権大使（視覚言語で国際交流）：ドイツ学園との交流	
・心に響く形をパプアニューギニアの芸術から学ぶ：選択授業「心の仮面をつくろう」	
3. 他民族、他地域の文化を理解し尊重する学習の必要性	
4. 異文化に関する教育内容と指導方法の開発の実践的試み	
—アメリカのポピュラー音楽を窓にして現代社会をのぞく—	
5. 日本の教育における異文化学習の課題	
第4節 第3章のまとめ	56
第4章 芸術教科の統合的アプローチによる文化学習の可能性と課題	57
第1節 学校教育における芸術教科の機能	58
1. 芸術教育の目的・意義	
2. 現代社会における芸術の有用性	
3. 日本の学校教育における芸術教科の役割	
4. 学校教育における芸術教科の教育的価値	
第2節 統合的アプローチによる文化学習のカリキュラム—提案—	
1. 芸術教科の文化学習が関係する項目と学習材	65
2. 自己の文化的アイデンティティを対象にした統合的アプローチによる学習材と指導方法の開発	
3. 日本文化の対象にした統合的アプローチによる学習材と指導方法の開発	
4. 外国文化を対象にした統合的アプローチによる学習材と指導方法の開発	
5. 現代社会の文化理解を対象にした統合的アプローチの学習材と指導方法の開発	
第3節 第4章のまとめ：統合的アプローチによる文化学習学習実施のための課題	68
おわりに	69
【注】	70
【参考文献および教科書関係資料】	75
【巻末資料集】	79
【資料1】 関連する「学習指導要領」	80
【資料2】 全米芸術教育標準	88
【資料3】 全米芸術教育標準：教科間の関連及び文化理解に関する活動内容	94
【資料4】 アジア諸国の芸術教科統合に関するデータ	95
【資料5】 台湾「九年一貫教育課程」関連部分の抜粋（日本語訳）	106
【資料6】 台湾康軒文教事業版教科書『芸術と人文』の単元構成（日本語訳）	108
【資料7】 「音楽と描画の統合的アプローチ」授業における配付資料	110
【資料8】 “Musikland 8”における単元「現代の音楽家」（日本語訳）	112